



写真-34 プロジェクション・マッピングの様子 (ファブリカ・チュシュチヌイのウェブサイトより)

Kulczyńska)、アグニエスカ・フミエレフスカア (Agnieszka Chmielewska) の3人が担当。2003年9月に正式オープンした。この時点ではワルシャワ初の民間セクターの経営する芸術センターであった。

2005年には新しい演劇シーンである「新プラハ劇場 (Teatr Nowy Praga)」が開設されるが、2015年現在は閉鎖、その活動は新たな「マゾヴィエツキ劇場 (Teatr Mazowiecki) : マゾフシエ県劇場」に統合されている模様。

(3) 概要

同施設は、地域の芸術と教育を中心に活動を展開する完全に民営の複合型アートセンターであり、閉鎖中の新プラハ劇場のほか、レストラン、展示ホール、クラブ、3つのバー、会議室など合計3,000㎡以上の各種スペースと、90台収容の駐車場がある。

近代工業独特の外観をそのまま活かすデザインは、典型的なポスト・インダストリアル・デザインの手法の一つである。(写真-34)

活動内容は、公共コンサート、映画上映、ファッションショー、シンポジウム、会議やミーティングのほか、現代作家やジャーナリスト、政治化たちのプロモーション活動にも及んでいる。政治要素が入り込んでいるのは、民間セクター施設であることの特徴であるとも考えられる。

本体のほか、「広場 (Skwer)」と言う名前の下で活動する支部があり、クラクフ郊外には「チュシュチヌイ・ファクトリー・アートセンター支部 (Filia Centrum Artystycznego Fabryka Trzciny)」がある。

なお、創設者のヴォイチェフ・チュシチンスキは、「パスポート・ポリシー (Paszport Polityki) 2004」や「キシエル賞 (nagrodę Kisiela) 2007」など、多くの文化芸術関連の賞を受賞している。

(4) 関連事項など

今回調査では、残念ながらファブリカ・チュシュチヌイ本体への取材は出来ず、プラガ地区の概観を視察するにとどまっており、本稿の記述も文献やウェブサイトの情報をもとにしている。

2015年現在のプラガ地区は、かつての危険地帯と言われたころの雰囲気はだいぶ薄らいで、活発な都市開発が

進行中である。先に触れた新しいサッカー・スタジアムと、旧都心と直結する地下鉄2号線の延伸 (写真-35)、地下鉄駅に接続して整備されたショッピング・センター「ガレリア・ヴィレニスカ (Galeria Wileńska)」(核テナントはカルフル) などが転換の契機となっている。こうした新たに再開発されたエリアからは、かつての貧しい工場労働者の町といったイメージは感じられないが、すぐ裏手にはまだまだ開発・整備の及ばない地区が共存している。

こうした近年の経済の活況と、「ワルシャワのソーホー」と呼ばれる「アートの力」による社会の更正や内発的なコミュニティ・ビジネスなどの効果との関係は、一見ただけでは窺えない。継続してより踏み込んだ調査を行うことを予定している。



写真-35 地下鉄出口 (メトロのMのデザイン)

5. フィルハーモニー (Polska Filharmonia Bałtycka im. Fryderyka Chopina) ; グダンスク²⁰⁾

正式名称は「ポーランド・バルト・フレデリック・ショパン記念・グダンスク・フィルハーモニック交響楽団 (Polska Filharmonia Bałtycka im. Fryderyka Chopina w Gdańsku)」。ポーランド北部のグダンスク (Gdańsku) (あるいはグダニスク) に本拠を置くオーケストラで、その本拠地として旧発電所の建物を改装して新